

I 実践

1 研究主題 「互いに認め合い、励まし合い、助け合うことのできる児童の育成」

(1) 主題設定の理由

本校は、「ふるさと山部を愛し 心豊かに たくましく生きる 山部っ子の育成 ーかしこく、なかよく、たくましくー」を学校教育目標としている。児童の約3割は、祖父母と同じ敷地に居を構え、祖父母と関わりをもつ機会が多い。児童は明るく素直で、高学年の児童が低学年の児童の面倒をよく見ている。しかし、少人数のため、集団生活の中で甘えが出て、自己中心的な言葉や行動をとってしまう児童もいる。また本校は、複式学級3クラスでクラス替えもないため、友人関係が崩れてしまうとなかなか修復が難しい。小学校を卒業後は人数の多い中学校へ進学することを考えると、集団の中で思いやりの心をもって、誰とでもなかよく生活できる児童の育成が必要である。さらに、今年度より自閉症・情緒障害特別支援学級が設立され、それぞれの特性を理解し、一人一人ができることを大切に認め合える心を育てていくことが課題としてある。

そこで、学校の教育活動全般の体験や交流を通して、本校のめざす児童像である「明るく、思いやりのある子ー互いに認め合い、励まし合い、助け合う子ー」の育成を目指して本主題を設定した。

(2) 研究の内容

- ア 総合的な学習の時間、特別活動、道徳を中心とした全教育活動における人権教育の充実
- イ 異学年との交流活動
- ウ 豊かな体験活動の展開
- エ 教職員自らの人権に関する認識を深めるための研修

2 実践内容

(1) 総合的な学習の時間、道徳、特別活動を中心とした全教育活動における人権教育の充実

ア 総合的な学習の時間の実践

「ともに生きるーお年寄りの方々とふれあおう」をテーマに、地域にある介護施設を訪問した。歌や劇を披露し、お年寄りの方々に大変喜んでもらった。体の不自由な方々とのふれあいを通して、ともに生きるという気持ちをもつことができた。(3・4年)

イ 人権教育を取り入れた道徳授業の展開

いばらき教育月間の取り組みの1つとして、土曜授業でメディア教室(写真1)と道徳の授業を行った。専門家から情報に関わるトラブルの事例や回避策を保護者ともに学ぶことができ、情報モラル教育の充実が図られた。また、全学級で人権教育にかかわる内容を取り上げ、道徳の授業を行った。1・2年学級では「だっこしながら」を取り上げ、体験活動を取り入れながら自分の命も友達の命も同じく尊く大切なものであることを話し合ったり考えたりすることができた。保護者の参観もあり、家族の絆や思いが深まるよう働きかけた。

ウ 人権教育を考えた学級経営

互いのよさを認め合える場を各学年で設定し取り組んだ。1・2年では、「今日のヒーロー」を実施し、一人一人のがんばりや優しさ等を見つけ発表し合った。

エ 児童集会(ハートフル集会：写真2)

運営委員会の児童が中心となって、いじめを防止する意識を高めるための集会を行った。最初に、学級ごとに話し合ったいじめ防止の標語を発表した。次に、運営委員による詩の朗読「ひとりひとり」他3作品の読み聞かせが行われた。いじめは、自分の身の回りで起こりうることであることと捉え、普段使うことばに気をつけたいという感想が聞かれた。



(写真1) メディア教室



(写真2) ハートフル集会

(2) 異学年との交流活動(たてわり班活動)

児童を4つのたてわり班に分け、年間を通して様々な集団活動に取り組むことによって、異学年児童相互の親睦を深め、他者への思いやりや助け合う心を養うことを目指した。

ア ドッジボール大会

異学年集団で活動することにより、互いに協力し合い、仲よくしようとする気持ちを育

ててきた。上級生は、下級生もゲームが楽しめるようにボールを回したり、優しく投げたりと、相手を思いやる優しい行動が見られた。

イ 愛校活動

たてわり班ごとに、週1回特別教室を清掃している。上級生が、下級生の面倒をみたり、やり方を教えたりしながら自分たちの学校をきれいにすることができた。学校の周りもきれいにしようと正門前の道路の落ち葉掃きも行った。

ウ 山部ふれあい運動会

本年度よりすべての種目が全校種目となり、たてわり班長や上級生が中心になって取り組んだ。下級生に対する配慮や上級生に対する感謝の気持ち等、班が一丸となって活動したり、学年を越えて互いを応援したりする姿が見られた。

エ なかよし給食

年三回の実施を通して、たてわり班や他の学年の児童、担任外の教師との親睦を図った。いつもとちがう場所や学年の違う友達との話が弾み、楽しく会食することができた。上級生が下級生の給食や机を運ぶ等、よく面倒を見る姿が見られた。

(3) 豊かな体験活動の展開

ア 山部ふれあい運動会

来賓・敬老玉手箱で、地域の高齢者や招待した介護施設の高齢者に、児童が書いた手紙を添えて、育てた花の苗をプレゼントした。手をつないだり、話をしたりして、高齢者に対する気配りが見られた。1～3年と未就学児合同競技の玉入れでは、同じ速さで歩けるよう意識して入場したり、泣いている幼児に声をかけたりと、思いやりをもって接することができた。

イ やまびこフェスティバル (写真3)

北方蕎麦の会から講師を招き、蕎麦打ち体験を実施した。たくさんの方と交流できるように地域の方や家族への招待状を書いたり、手紙を届けたりする活動を全児童で行った。当日は、地域の方が多数参加し「上手にこねるね。」「おいしそうだ。」と声をかけてもらいながら、温かい雰囲気の中で活動ができた。

ウ あいさつ運動

「山部っこ交通運動」として、児童から「安全運転をありがとう」のメッセージを地域のドライバーへ発信している。また、日頃から横断歩道を渡るときには車を停止させないように、車の往来がないのを確認しながら、押しボタンを押すなど、地域を走るドライバーへの心遣いが身についている。また、「小中合同あいさつ運動」では、朝早くから卒業生たちが児童たちを笑顔で迎えてくれて、互いに元気なあいさつを交わすことができた。

エ 動物ふれあい教室 (1・2年：写真4)

自分や友達、さらに犬の鼓動を聴診器で聞いたり、犬の体に触れたりした。動物も自分たちと同じように鼓動を打ち、同じように生きていることを感じとることができた。

(4) 教職員自らの人権に関する認識を深めるための研修

人権教育資料集「あなたならどうする？」に掲載されている絵から研修を行った。普段の生活の中に隠れている人権問題を改めて職員全体で確認し、自分自身の発言や学級経営に役立てたいという感想があった。



(写真3) やまびこフェスティバル



(写真4) 動物ふれあい教室

3 成果

(1) 道徳や総合的な学習の時間、特別活動等を通して、自分の生活を振り返り、自分自身や友達について考える児童が増えている。

(2) 異学年集団の活動を通して、互いに認め合う気持ちや励まし合う態度が見られた。高学年の児童が低学年の児童を気遣う優しさが育ってきている。

(3) 様々な体験活動を通して、高齢者を始め、いろいろな人とふれ合うことができた。そのことによって、相手を思いやる心や命の大切さなどを学ぶことができた。

II 今後の課題

様々な人権問題については身近な例や報道等を取り上げ学活や人権コーナー (写真5) 等で、児童に知らせていく必要がある。そのため、教師の人権教育に関する正しい理解と認識を高めるための研修をより充実させ、人権教育の啓発に取り組んでいけるようにする。



(写真5) 人権コーナーの設置の様子